

# コーパスに基づく文法教授法の見直し：

## megafepsの真偽を問う

### Reviewing Grammar Instruction Based on Corpus Studies:

#### Questioning the Authenticity of *megafeps*

次世代教育学部教育経営学科

井上 聡

INOUE, Satoshi

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：動名詞，コーパス，母語話者，学習者，教科書

**Abstract** : The variation of verbs which are followed by gerund varies widely, and as many as 74 kinds are presented in previous studies. In order to promote learners' understanding about the usage, the term '*megafeps*' (Egawa, 1991) is often used, including *mind, miss, enjoy, give up, admit, avoid, finish, escape, practice, put off, postpone, stop* and *suggest*. Based on three types of corpus, (native speaker, learner, and textbook), the following findings have identified: The verbs used most frequently are *stop, avoid, consider, enjoy* and *risk*, but learners underuse *consider* and *risk*. It is important to review English teachers' explicit knowledge about the usage of *megafeps*.

**Keywords** : gerund, corpus, native speaker, learner, textbook

## I. はじめに

多岐に渡る英語動詞の中には、学習者にとって、簡単そうに見えて、実際には理解しにくいものがある。目的語として、不定詞と動名詞の使い分けが求められる動詞もそのひとつである。動名詞を導く動詞に関して言えば、中学校の段階ではstop, enjoy, finish程度にとどまるが、高校進学とともに増加し、*megafeps* (mind, miss, enjoy, give up, admit, avoid, finish, escape, practice, put off, postpone, stop, suggest の頭文字をとったもの) (江川, 1991) という呪文のようなフレーズに基づいた指導が行われることが多い。CD (considerとdenyの頭文字) という言葉を付加した指導や教材記述も見受けられる。しかしながら、メガフェップスというフレーズ自体に特別な意味が込められていないため、そこから13種もの動詞を連想させることはきわめて難しい。筆者自身は、高校時代に*megafeps*の暗記を強いられた経験も、知らなかったせいで苦労した記憶も持たないため、*megafeps*に基づいた指導や教材記述を目にするたびに、そのフレーズに

含まれる動詞の信憑性について検証を行うべきではないかと考えてきた。よって、本研究では、「不定詞ではなく動名詞を後続させる動詞」を調査対象とし、3種のコーパス(母語話者、学習者、教科書)分析に基づき、*megafeps*の信憑性を検証するとともに、教育的に重要と言える動詞のリスト化を試みる。

以下、第2節においては、先行研究の概観を通して、動名詞の機能、動名詞を導く動詞の種類と意味などについて整理を行い、本研究で明らかにすべき課題を抽出する。続いて第3節では研究の枠組みを、第4節では研究結果と考察を示し、第5節において、今後の指導の方向性や教材記述のあり方について示唆を行う。

## II. 先行研究

### 1. 動名詞の機能

動名詞の機能については、to不定詞との違いに基づいて説明されることが一般的である。次の用例は、Thomson & Martinet (1986) によるものである。

- (1) He found it difficult to park.  
 (2) He found parking difficult.

(1)(2)の日本語訳はともに「彼は駐車することが困難だとわかった」である。to不定詞を用いた(1)には「特定の一場面」が含意されるのに対して、動名詞を用いた(2)には、「日常性」が含意されるという(Thomson & Martinet, 1986 : 228)。アスペクトの観点から動名詞の機能を説明しようとする考えとしては、他に、「ある過程の具体的な結果」(Huddleston & Pullum, 2003 : 1702), 「時間的に延長された活動や状態」(Dixon, 2002 : 258), 「相対的な時間関係を示し、現在・過去を指す」(Declerck, 1991 : 685) といったものがある。未来志向を含意するとされるto不定詞とは対照的な性質である。

## 2. 動名詞を後続させる動詞の種類と意味

動名詞を後続させる動詞の種類は先行研究によって様々であり、のべ74語にのぼる。下記は、7種の先行研究(Thomson & Martinet, 1986 ; Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1983 ; Quirk et al., 1985 ; Swan, 2005 ; 江川, 1991 ; 綿貫, 2008 ; 石黒, 2009) において提示された動詞のリストである。

### (1) Thomson & Martinet (1986) ※37種

admit, anticipate, appreciate, avoid, consider, defer, delay, deny, detest, dislike, dread, enjoy, escape, excuse, fancy, finish, forgive, imagine, involve, loath, mean, mind, miss, pardon, postpone, practice, prevent, propose, recollect, remember, resent, resist, risk, save, stop, suggest, understand

### (2) Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983) ※25種

admit, anticipate, avoid, begin, continue, defend, deny, dislike, enjoy, finish, forget, hate, intend, like, love, prefer, quit, recall, regret, remember, resume, risk, start, stop, try

### (3) Quirk et al. (1985) ※50種

admit, avoid, bear, begrudge, cease, commence, confess, consider, continue, deny, deserve, detest, discourage, dislike, dread, enjoy, envisage, escape, fancy, forget, hate, help, imagine, involve, justify, like, loathe, love, mind, miss, need, permit, propose, quit, recall, recommend, regret, relish, remember, repent,

require, resent, resume, risk, save, stand, start, stop, try, want

### (4) Swan (2005) ※37種

admit, appreciate, avoid, burst out, consider, contemplate, delay, deny, detest, dislike, endure, enjoy, escape, excuse, face, fancy, feel like, finish, forgive, give up, help, imagine, involve, keep, leave off, mention, mind, miss, postpone, practice, put off, resent, resist, risk, stand, suggest, understand

### (5) 江川 (1991) ※32種

admit, advise, allow, appreciate, avoid, consider, delay, deny, enjoy, escape, evade, fancy, finish, give up, help, imagine, leave off, mind, miss, permit, practice, postpone, prohibit, put off, quit, understand, recall, recollect, recommend, resist, stop, suggest

### (6) 綿貫 (2008) ※15種

admit, avoid, consider, deny, enjoy, escape, excuse, finish, give up, imagine, involve, mind, postpone, put off, stop

### (7) 石黒 (2009) ※16種

admit, avoid, consider, deny, enjoy, escape, finish, imagine, mind, miss, practice, quit, stop, suggest, give up, put off

7種の先行研究で提示される動詞の種類には重なりが見られる反面、提示数は一定していない。この原因は、当該動詞の定義の仕方に因るものと考えられる。特に、欧米の先行研究においては、to不定詞の後続が可能な動詞(forget, regret, remember, start, try)が多数含まれるように、必ずしも「動名詞のみ」という性質に焦点が当てられるわけではない。Swan (2005 : 271-272) においては、「通常、to不定詞ではなく、動名詞を従える動詞がある」と記されるものの、動名詞を後続させる動詞の特定が容易ではないという指摘もなされている。

一方、日本の文法書では、「動名詞のみ」という性質に焦点が置かれるのが一般的である。たとえば、「動名詞だけを目的語にとる頻出動詞」(綿貫, 2008 : 184), 「動名詞と不定詞はともに他動詞の目的語として用いられるが、どちらを目的語にとるかは動詞によって決まる」(石黒, 2009 : 198) といった記述が見

られる。江川（1991：364-367）においては、「動名詞だけを目的語とする動詞」という見出しのもと、7種の意味分類（中立、過去、回避、遅延、終了、許可、助言）が行われるとともに、記憶させるための手段として*megafeps*というフレーズが提示されている。

### 3. 先行研究の批判的検討

先行研究を概観した結果、目的語の捉え方に違いが見られた。とりわけ、日本の先行研究では、「動名詞のみ後続させる」という性質に焦点が当てられるとともに、当該動詞の絞り込みや意味分類が行われる傾向が見られた。しかしながら、欧米の先行研究においてそれほど厳密に区別されていない点、提示される当該動詞の種類が多岐に渡る点、実際の頻度情報や学習者の使用傾向に関する情報が提示されていない点などを考えると、*megafeps*の信憑性を見直しを目的として、様々な観点から当該動詞の用法を分析する必要性が生じたと言える。

## Ⅲ. 研究の枠組み

### 1. リサーチ・クエスチョン

本研究の目的は、「不定詞ではなく動名詞を後続させる動詞」のリスト化を行うことである。すでに述べたように、先行研究において提示された動詞群は多様であり、のべ74語に及んでいた。この中から、教育的に重要と言える動詞を特定することを狙いとして、下記のようにリサーチ・クエスチョンを設定した。

- RQ1 母語話者の使用頻度にはどのような差があるか。
- RQ2 同一の統制条件で産出された英作文において、学習者と母語話者の間にはどのような差があるか。
- RQ3 教科書本文の出現頻度と学習者の使用傾向の間にはどのような関係が存在するか。

### 2. データ

本研究で使用するデータは、母語話者コーパス、学習者コーパス、教科書コーパスの3種類である。以下、簡潔にそれぞれの概要について説明を行う。

母語話者コーパスとしてはCOCA (Corpus of Contemporary American English) を使用する。COCAは、Mark Davies氏によって構築された現代アメリカ英語の大規模データベースである。1990年から毎年、デー

タの追加が続けられており、2014年の段階（本稿執筆時）で、その収録語数は4億5,000万語となっている。また、言語の諸相をバランスよく反映するために、5種の領域（SPOKEN, NEWSPAPER, FICTION, MAGAZINE, ACADEMIC）から万遍なく言語資料が集められている。そういった点で、きわめて学術的で信頼性の高いコーパスであると言える。

学習者コーパスとしては、ICNALE（石川, 2012）と井上（2012a）を使用する。ICNALEは、執筆条件が高度に統制された英作文データベースである。トピックは2つのみ（アルバイトの是非、禁煙の是非）で、執筆時間（20～40分）と執筆分量（英語：200～300語）については上下限が設定されている。本研究では、日本人大学生モジュール（約800サンプル、約25万語）と英語母語話者モジュール（400サンプル、約9万語）をデータとして使用する。井上（2012a）には、ICNALEとほぼ同じ統制条件のもと、高校3年生200人によって産出された約37,000語が収録されている。作文トピックについては、高校生のアルバイト経験が不足している点を考慮し、「禁煙の是非」のみとした。

教科書コーパスとして使用するのは、井上（2012b, 2013）である。教科書本文を電子化の対象とし、文法説明のための用例は除外した。井上（2012b）は、作文協力者である高校生が使用していた「英語Ⅰ・Ⅱ」の6種12冊をデータ化したものである。のべ語数は99,423語、異なり語数は5,496語（レマ化済み）である。井上（2013）は、平成25年に新たに採択された「コミュニケーション英語Ⅰ」の22冊をデータ化したものである。のべ語数は132,668語、異なり語数は7,440語（レマ化済み）である。文法知識の記述内容の調査に関しては、コミュニケーション英語Ⅰを参照する。

### 3. 手法

本研究の目的は、母語話者の用法を解明し、学習者の逸脱的使用傾向と教科書における出現状況を加味して、*megafeps*の教育的意義を再考することである。RQ1ではCOCAにアクセスし、頻度検索を行う。COCAには、検索機能として品詞タグが付与されており、97%の精度で検索が可能である。たとえば、 $[v^*]$ と入力することによって、あらゆる動詞の検索が可能に、また $[v?g^*]$ と入力することで-ing形の検索が可能となる。本研究では、「動詞+動名詞」の組み合わせの頻度取得が必要となるため、 $[v^*][v?g^*]$ の

検索式を入力し、先行研究で取り上げられた74語の動詞について計量分析を行う。次に、[動名詞共起頻度÷動詞頻度]の計算式から得られた比率に基づき、動名詞との結びつきの強い動詞について調査を行う。動名詞共起頻度には[v\*][v?g\*]で得られた数値を、動詞頻度には[v\*]で得られた数値を用いる。割合の高い動詞ほど、動名詞との結びつきが強いものと判断を行う。最後に、クラスター分析を援用し、当該動詞の意味分類を行う。その際の基準として、(1)当該動詞に導かれる動名詞の頻度、(2)当該動詞を修飾する-ly副詞の頻度、という2種の観点を採用する。動名詞の出現範囲は当該動詞の直後位置、-ly副詞については、[v\*][v?g\*]の左右4語内とした。出力された樹状図に対して、鎖効果を抑えられる位置にカットライン・ポイントを置き、分類された個々のクラスター内に含まれる特徴語(変数別クラスターの高いもの)の意味傾向に基づいて検討を行う。

RQ2では、学習者の使用状況について分析を行う。同じ統制条件で産出された作文データに基づき、(1)当該動詞の全体頻度、(2)当該動詞個別の使用比率、(3)共起動名詞の意味、という3種の観点から、3群(高校生・大学生・母語話者)間の使用状況の違いを観察し、学習者特有の傾向について検討を行う。なお、解析ソフトとしては無料で入手可能なAntConcを利用し、「動詞+動名詞」の組み合わせをすべて検索する。

RQ3では、コレスポネン分析を援用し、学習者の使用状況と教科書本文の関係について議論を行う。3種の作文(高校生・大学生・母語話者)と新旧教科書(英語I・IIとコミュニケーション英語I)を第1アイテムに、当該動詞の使用頻度を第2アイテムに設定し、アイテム散布図、寄与率、各象限の性質に基づいて検討を行う。なお、解析に際しては、石川・前田・山崎(2010)に添付された統計ソフトSeagull-Statを使用する。

## IV. 結果と考察

### 1. 母語話者の用法

#### 1.1 当該動詞の使用頻度

先行研究において動名詞を後続させる動詞は74種類に及んでいたが、そういった動詞、とりわけ、*megafeps*に含まれる動詞群には、どのような頻度差が存在するのだろうか。COCAに基づいて、当該動詞の頻度検索を行ったところ、上位

語は、stop (25,118), avoid (8,373), consider (7,383), enjoy (5,942), finish (4,064), involve (3,989), mind (3,653), risk (3,301), help (3,203), stand (3,159), imagine (3,156), suggest (2,706), recommend (2,659), face (2,408), require (2,403)の順となった。この結果から読み取ることができる特徴は、次の2点である。

1点目は、74語間に大きな頻度差が存在することである。特に、'stop'の使用頻度は突出しており、それ以外で10,000を超える動詞は見当たらなかった。さらに、動名詞を後続させる頻度が極端に低いものもいくつか見られた(repent: 3, begrudge: 2)。2点目は、*megafeps*に含まれる動詞群にも明確な頻度差が認められたことである。前述の上位語に含まれるのは6語のみ(stop, avoid, enjoy, finish, mind, suggest)であり、残りの7語の頻度は、practice (1,627), give up (1,184), miss (1,120), admit (800), put off (338), escape (232), postpone (136)となった。postponeの使用順位は74語中43位である。これらの動詞は「不定詞ではなく動名詞を後続させる」性質を有するものではあるが、使用頻度という点では、必ずしも重要度が高いとは言えない。そういった動詞が教育現場で重視されている状況は驚きである。

### 1.2 動名詞の共起率

4.1.1では動名詞を導く動詞の使用頻度を調査対象としたが、ここでは動名詞との結びつきの強さに注目して調査を行う。比較のための算出式は、[動名詞共起頻度÷動詞頻度]である。stopを例にとると、動名詞共起頻度が25,118、動詞頻度が139,994であるため、動名詞共起率は17.9%となる。

先行研究で扱われた74語の動詞の中で比較的共起率の高いものは、burst out (32.7%), risk (30.0%), mind (18.2%), stop (17.9%), put off (17.4%), avoid (16.9%), dread (16.4%), quit (15.6%), practice (13.2%), regret (13.0%), enjoy (11.7%), resist (10.8%), recommend (10.6%)であるが、これら上位語の中にも大きな段階性が存在することがわかる。特に、riskの共起率(30%)の高さは注目に値する。*megafeps*に含まれるあらゆる動詞の共起率よりも高いことを考えると、教育現場で触れられていないのは意外である。burst outについては、後続する動名詞の90%が'laughing'で占められるため、成句として捉えるべきであろう。

一方、*megafeps*内において、動名詞との共起率がきわめて低い動詞の存在が確認された (give up : 5.0%, admit : 2.0%, miss : 2.0%, escape : 1.2%)。これらの動詞が不定詞を後続させる可能性はないものの、動名詞を後続させない割合が90%を超えていることを考えると、「動名詞のみを後続させる」動詞として過度に強調する必要性は低いと言える。補足的に、動詞の後続部を検索したところ、自動詞的に使用される傾向を持つ動詞 (give up, escape) や節を導く傾向を持つ動詞 (admit) などが確認された。よって、本研究で示された共起率は、動名詞との結びつきの程度というよりも、各動詞の多動性の程度を示しているものと考えられる。

### 1.3 補部動詞と-ly副詞の意味に基づく分類

次に、当該動詞の意味分類を行う。4.1.1で得られた当該動詞の上位15語をケースに、COCAから検索された共起語 (補部動詞と-ly副詞) のそれぞれ上位50語を変数に設定してクラスター分析を行ったところ、下記の図1、2のような樹状図 (デンドログラム) が出力された。

また、表1、2は、それぞれの特徴語 (変数別クラスターの高いもの) を列挙したリストである。補部動詞から順に検討を行う。

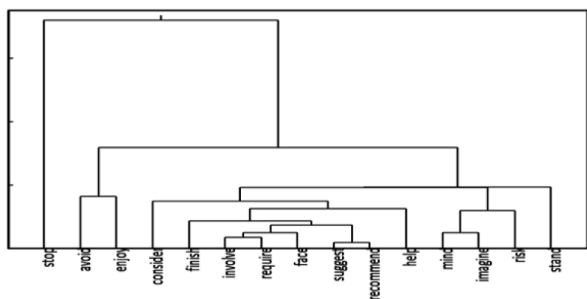


図1 樹状図 (補部動詞)

上図を見ると、広範囲にわたって鎖効果が生じていることがわかる。特に、considerからhelpまでの群内における鎖効果が強い点、また、mindからstandまでの群と前述の群の距離がほぼ同じであること点を考慮し、その上の位置にカッティング・ポイントを置いたところ、3種のクラスターに分類することができた。では、特徴語を見てみよう。

表1 補部動詞の特徴語

クラスター	当該動詞	共起補部動詞 (特徴語)
第1	stop	talking, working, doing, using, taking, thinking
第2	avoid, enjoy	being, having, getting, watching, looking, seeing
第3	その他	losing, waiting, moving, leaving

第1クラスター (stop) の特徴語が基本動詞で占められているのは、stop自体の使用頻度が突出しており、共起する補部動詞の種類が多岐に渡っているためと考えられる。一方、第2クラスター (avoid, enjoy) の特徴語は、高頻度動詞 (be, have, get) と知覚動詞 (watch, look, see) の2種に分かれた。下記はavoidの使用例の一部である。

- (1) He **avoided being** sent to Vietnam by enrolling at City College .....
- (2) .... and his company **avoided having** to register with the S.E.C. ....
- (3) Some parents allow children to do it to **avoid getting** teased or bullied .....

上記の用例のように、avoidと共起するbe, getの大半は受動態の一部として使用されていた。また、haveの大半はhaving toであった。こういった「受動や義務」のような負担を表す表現に加え、「視覚行為」がenjoyと共通している点は大変興味深い。第3クラスター (その他12語) については、移動を示す動詞が抽出されたものの、変数別クラスターが小さく、鎖効果が強い点、明確な意味分類は困難であった。しかしながら、使用幅の広さや独自性という点でstop, avoid, enjoyの際立ちが確認されたことは、指導語を特定するうえで有用な情報となる。では、次に図2を見てみよう。図1と同様に、鎖効果を避けることを目的としてカッティング・ポイントを設定したところ、4種のクラスターに分類することができた。

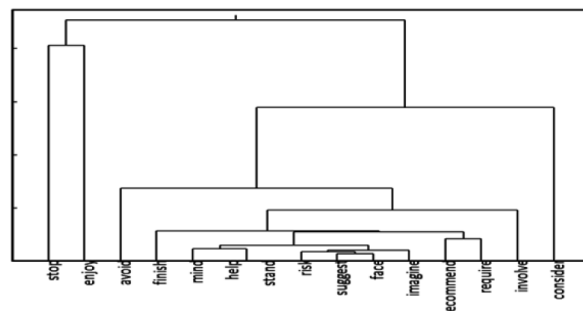


図2 樹状図 (-ly副詞)

表2 -ly副詞の特徴語

クラスター	当該動詞	共起-ly副詞 (特徴語)
第1	stop	finally, eventually, suddenly, immediately, abruptly
第2	enjoy	really, especially, thoroughly, particularly, truly
第3	consider	seriously, briefly, strongly, directly
第4	その他	carefully, highly, typically

上表からわかるように、第1クラスター (stop) では「最終的に」「即時に」「不意に」、第2クラスター (enjoy) では「本当に」「特に」、第3クラスター (consider) では「真剣に」「強く」「直接的に」といったものが選ばれている。-ly副詞については、当該動詞と動名詞のいずれか一方を修飾する場合が考えられるが、下記の用例を中心として、抽出された特徴語の大半が当該動詞を修飾するものであった。

- (4) And he eventually stopped coming and I wondered why ....
- (5) And he particularly enjoys talking with his dad, ....
- (6) ... said she seriously considered leaving the state a few years ago ....

上記の用例のように、副詞に基づくクラスター分析の結果、「すぐに終わる」、「心から楽しむ」、「しっかり考える」といった意味に分類することが可能になった。stop, enjoyに加え、considerについても独自性が示された点は興味深い。ただし、これら-ly副詞は動名詞ではなく、動名詞を後続させる動詞の特徴を示すものであるため、本研究の目的からは乖離した結果となった。

#### 1.4 小括

母語話者コーパスに基づく分析の結果、*megafeps*に代表される動詞群の信憑性に揺らぎが認められた。今後の指導や教材開発において、*megafeps*に固執することなく、中学で既習の動詞 (stop, enjoy) に *avod*, *consider*, *risk*を加えた5語を重視することによって、学習者の認知負荷を軽減することが可能となるであろう。

## 2. 学習者の使用状況

ここでは、同一の統制条件のもとで産出された作文データに基づき、高校生・大学生・母語話者の3群間

の違いについて検討を行う。一般的に、習熟度の上昇に伴って母語話者の使用傾向に近づくものと考えられるが、実際はどうであろうか。下記の図3は、動名詞を導く動詞の全体頻度を示したものである。

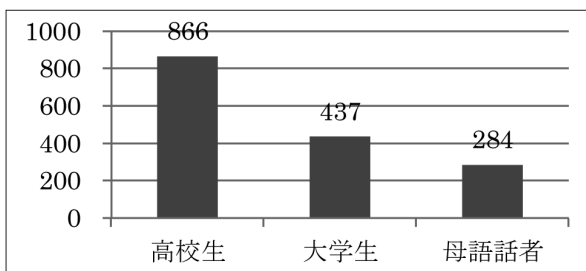


図3 V + Vingの使用状況

図3を見ると、高校生の使用量は母語話者の約3倍、大学生の使用量は約1.5倍である。いずれも有意差が確認されたため ( $\chi^2=183.3, df=1, p < .001$ ;  $\chi^2=35.6, df=1, p < .001$ ), 2群ともに過剰使用していることになる。また、高校生と大学生の間にも有意な差が見られるため ( $\chi^2=117.6, df=1, p < .001$ ), 習熟度の上昇に伴って、母語話者の使用傾向に近接していることになる。

次に、当該動詞の個別使用状況を比較検討したところ、高校生、大学生ともに *admit*, *avoid*, *begin*, *ban*, *bear*, *dislike*, *enjoy*, *give up*, *hate*, *help*, *like*, *stop* を過剰使用する一方で ( $p < .001$ ), *allow*, *disallow*, *consider*, *discourage*, *risk*には過少使用傾向が認められた ( $p < .001$ )。 *megafeps*に含まれる一部の動詞 (*admit*, *avoid*, *enjoy*, *give up*, *stop*) と自己関与を示す動詞 (*dislike*, *hate*, *like*) が多用される反面、4.1において重要性が示された動詞 (*consider*, *risk*) に関する理解は不足していることがわかる。引き続き、後続部の動名詞の意味傾向に目を向けると、さらに逸脱的な傾向が読み取れた。

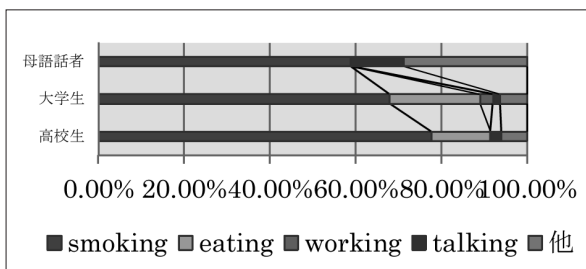


図4 動名詞の使い分けの傾向

図4を見ると、学習者の使用する動名詞が *smoking* と *eating* の2語に大きく偏っている。母語話者の占有率が60%程度にとどまっているのに対して、高校

生・大学生については、90%が上記の2語で占められている。下記は3群による使用例の一部である。

- (7) I think that they can't give up smoking. (高)  
 (8) People come to the restaurant to enjoy eating or talking. (大)  
 (9) They come to avoid using the restaurants. (大)  
 (10) Above all, non-smokers mind smoking. (母)  
 (11) ... many small restaurant owners will risk breaking the law. (母)  
 (12) Students should consider getting a job as soon as they commence .... (母)

学習者の使用例の中心は、上記のように、*megafeps*に含まれる一部の動詞 (admit, avoid, enjoy, give up) に特定の動名詞 (smoking, eating) を共起させたパターンであった。母語話者が、considerやriskをはじめとして、*megafeps*以外の動詞と多様な動名詞を組み合わせているのとは対照的である。原因としては、'risk Ving' (あえて～する) という表現に対する文法知識の欠如、'think' 以外の「考える」という表現の欠如、作文トピック (禁煙の是非) からの影響などが考えられる。また、3例ではあるが、用例(10)のような誤用パターン (通例、疑問文や否定文で使用する 'mind + Ving' を肯定文で使用) が見られた。誤用数は少ないが、学習者の理解不足を示す貴重な事例であるため、今後の指導に生かしたい。

### 3. 教科書と学習者の関係

COCA高頻度15語を調査対象として、3種の作文 (高校生・大学生・母語話者) と新旧教科書 (英語 I・II とコミュニケーション英語 I) を第1アイテムに、それらの使用頻度を第2アイテムに設定してコレスポネンス分析を行ったところ、下記のアイテム散布図が出力された。成分1の寄与率は54.2%、成分2の寄与率は22.7%、累積寄与率は76.9%となった。

2種のアイテムの関係を明確にするために、距離の近いアイテム同士を楕円でマークしたところ、4群 (母語話者作文、大学生作文、高校生作文、新旧教科書) に分類することが可能となった。注目すべきは、*megafeps*に関する動詞の大半が学習者のグループに含まれる点、母語話者の特徴語の中にconsiderとriskが含まれる点、教科書本文のグループが*megafeps*から離れている点である。高校生 (stop, finish, give up) から大学生 (admit, avoid) へと移行するにつれて使用

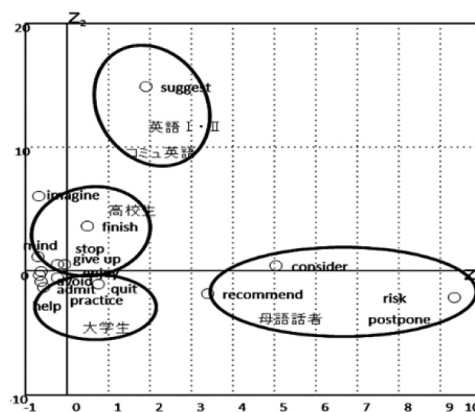


図5 アイテム散布図

語のレベルが上がるものの、教科書以外の手段に起因する可能性が示されたことになる。教員独自の指導法や大学受験用の教材を通して、*megafeps*への理解が深められた結果、母語話者とは異なる、日本人学習者独自の中間言語 (interlanguage) の体系が形成された可能性が考えられる。

## V. おわりに

### 1. RQのまとめ

本研究では、3種のコーパスに基づき、「不定詞ではなく動名詞を後続させる動詞」の用法について分析を行った。以下、結果をまとめる。

RQ1では、COCAのデータに基づき、当該動詞の頻度分析、動名詞の共起率、意味分類を行った。その結果、*megafeps*内に大きな頻度差が存在すること、*megafeps*以外にも動名詞との結びつきの強い動詞が存在すること、補部動詞や-ly副詞と特徴的に共起する動詞の存在が示された。結果として、重要動詞として5語 (stop, avoid, enjoy, consider, risk) を特定することができた。

RQ2では、学習者コーパスに基づき、当該動詞の使用傾向について調査を行った。その結果、学習者の使用傾向は、母語話者とは対照的であった。*megafeps*に含まれる一部の動詞と一定の動名詞の組み合わせを過剰使用するものの、それ以外の動詞と多様な動名詞との組み合わせの知識については、不十分な状況が示された。

RQ3では、教科書コーパスを利用し、学習者の使用傾向との関係について調査を行った。その結果、学習者による逸脱的使用傾向と教科書の間に因果関係は見られなかった。むしろ、教科書以外の学習を通して、母語話者とは異なる独自の文法体系を形成している可能

性が読み取れた。

## 2. 教育的示唆

本研究を通して、動名詞を指導するうえで、これまで教育現場で支持されてきた *megafeps* の信憑性に揺らぎが見出されたことになる。特に、RQ1で示された情報は、「可能態と実動態のずれ」(Hymes, 1972)を示す貴重な実例である。今後は、stop, avoid, enjoy, consider, riskの5語を指導の中心に据え、基本用例や演習問題を再考することによって、現実の言語使用に近い指導が可能となるであろう。

ここで、補足的に、現段階における教科書の記述内容について触れておきたい。平成25年度に採択された必修科目「コミュニケーション英語Ⅰ」において、「動名詞を導く動詞」について明示的に記載されていたものは、22冊中21冊であった。ただし、基本用例に含まれる動詞としてはenjoy (72.3%)とfinish (22.7%)が中心的であり、中学生レベルにとどまっている。

日本の英語教科書においては、「不定詞と動名詞の使い分け」に関する記述が多く見られるが、動名詞を導く動詞の種類について明示された教科書は2冊(9%)のみであった。*UNICORN*(文英堂)には‘enjoy, finish, mind, miss’の4種が、*Vivid*(第一学習社)には‘enjoy, finish, stop, mind, practice’の5種が記載されていたが、本研究で確認された他の重要動詞(consider, risk)について触れる教科書はなかった。学習者が当該動詞の用法について知るうえで、教科書記述は不十分であり、他の情報源、たとえば、教師の説明や教科書以外の教材記述から知識を得ざるを得ない状況となっていることがわかる。先行研究における説明が曖昧であったことを考えると、教科書記述を改善することによって、英語教員の意識を向上させることは喫緊の課題である。

## 3. 制約と課題

本研究は、「不定詞ではなく動名詞を後続させる動詞」に着目したものであるため、限定的な結果を返した結果に過ぎない。本来であれば、「不定詞のみ」「動名詞のみ」「不定詞を中心に」「動名詞を中心に」といったカテゴリーに分け、共起度の段階性に応じた動詞分類を目指すべきである。検索手法や多変量解析の見直しを含め、研究の精緻化は今後の大きな課題である。

しかしながら、本研究を通して、教師が持つ明示的

文法知識のゆらぎという問題が見出された。今後、動名詞を後続させる動詞に限定することなく、様々な文法項目に対して、教師の文法知識を問い直し、指導のあり方や教材記述を考え直すことが重要となる。そういった意味で、コーパス研究が果たす役割は大きいと言える。

## 参考文献

- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. (1983) *The Grammar Book: An ESL / EFL Teacher's Course*. London, UK: Rowley.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, R. (2002) *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』(改訂三版) 東京: 金子書房.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Hymes, D. (1972). On Communicative Competence. In J. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected Readings* (pp. 269-293). Harmondsworth: Penguin.
- 井上聡 (2012a) 「高校生の自由英作文の評価指標の検討: 学習者コーパスに基づく検討」『英語教育研究』35: 13-30.
- 井上聡 (2012b) 「コーパスに基づく知覚動詞の研究: 教科書記述と高校生の使用実態の関係」『電子情報通信学会技術研究報告』112: 35-40.339, 35-40.
- 井上聡 (2013) 「学習モデルとしての教科書用例の改善: 使役動詞の記述例に基づく研究」英語コーパス学会第39回全国大会口頭発表資料
- 石黒昭博(監修) (2009) 『総合英語Forest』(第5版) 東京: 桐原書店.
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』 東京: ひつじ書房.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(編) (2010) 『言語研究のための統計入門』 東京: くろしお出版.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of English Language*. London, UK: Longman.
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage*. Oxford, UK: Oxford University Press.



Thomson, A. J. and A. V. Martinet. (1986) *A Practical English Grammar*. Oxford, UK: Oxford University Press.

築道和明（編）（2013）『Vivid English Communication I』東京：第一学習社.

綿貫陽（2008）『表現のための実践ロイヤル英文法』東京：旺文社.